

田 迎 聖 子

二二たけの女の話

田 迎 聖 子

こころだけの女の語

ここだけの女の話

昭和四十五年二月二十八日 発行
昭和四十九年七月二十日 五刷

定価六〇〇円

著 者 田 辺 聖 子

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話(業務部) 三三六六五二
(編集部) 三三六六五二
振替 東京八〇八番

印刷・株式会社金羊社 製本・植木製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Seiko Tanabe Printed in Japan 1970

目次

シーソー夫婦	5
下町	29
びっくりハウス	53
火気厳禁	81
帽子と求婚	107
旅行者はみな駅へ行く	125
金箔の街	139
巴里の泣き黒子	161
ろばと夢のなかの海	187
ここだけの女の話	215

装
幀

佐
野
繁
次
郎

ここだけの女の話

シーソー夫婦

「順番ですから、それでは何か、言わせて頂きます」

と、まん中あたりの席から立ち上った男がいった。半袖の香港^{ホンコン}シャツに、斜め縞のネクタイをしめた、実直な感じの三十前後のサラリーマンである。柔らかな大阪弁を使う男である。黒縁のメガネの奥で眼がパチパチしている。それが何か、頓狂な、あるいは途方にくれた風な印象を与える青年である。

「自分の一番好きな歌をあげて、その理由をいえるというのですが、僕はほんとの所、短歌に興味はないのであります。いや、短歌に限らず、俳句も詩も、一向ごぶさたの男でありまして、学生時代の受験勉強以後、文芸にはとんと無縁で過しております。

そんなことで、なぜ短歌講座に出たかといいますと、まことに申し訳ないのですが、時間つぶしと、夕涼みのためであります。幸いこの公民館は最新の建築で、冷房が利いておって、むしろあつい団地のわが家にいるよりは、はるかに快適なんであります。そうしてたまたま、僕もぐりこんだ部屋が短歌講座のクラスであつたというだけで、これは講師先生に対しても、主催の市民大学側に対しても、申し訳ないと思っておりますが」

と青年はいっそう、眼をパチパチさせて、途方にくれたような顔つきになった。

阪神間にあるQ市は、文教都市として有名である。人口は三十万ほどであるが、学校が多く、

高級住宅地を擁し、環境良好で、市当局は文教運動を推進している。

町の中央に公民館があり、市民大学が毎夏、開講される。

この町では短歌や俳句をたしなむ人が少なくないので、短歌講座は人気のあるクラスであるが、毎年のごとく、会期の終りになると、一夜は受講者同士の親睦パーティーにあてられることになっている。参加者はその機会に自作の短歌を披露して添削を仰いだり、また短歌に関する所感を発表して、同好のよろこびを頌ちあうのである。

しかし青年は、たまたまその席へもぐりこんだばかりに、順番が来て、よんどころなく立ち上らされるハメになったものとみえる。

「いま、皆さん方のお話を伺っておりますと、いろいろじつに、短歌に関してはおくわしいようで、もとより浅学の僕はとうてい、対等にお話できるような柄ではないんです。第一、僕は文学オンチといいますが、一度読んだ小説でも短歌でも俳句でも、二度と思い出せないのが困るのです。

ただ、どういふものか、あとにも先にも、ただ一首だけ、妙におぼえている歌があるのであります。それは新聞の投稿欄にあった歌でして、神戸の栗野英子という人の歌です。

へ人間至高の愛などありや一日の 労働の果てを ただねむりゆく

というのであります。どうですか？

栗野という人が、どんな人か、僕は知らん。知らんが、妙に僕の心を打つのであります。僕の日常をさながら歌っておるとしか、思われない。僕はこの歌が秀歌か、名作か知らん。しかし、うまいこと言うておるなあ、と心の底から共感できるとなれば、僕にとっての秀歌にちがいない

ですな。

それで今日は、その話をさせて頂いて、場ちがいな所へもぐりこんだ責任を果すことにいたします。

ゆうべのことですわ。

僕は妻に言いました。

へおい、今夜だけ一晚でええさかい、片づけもんは止めへんか

食後、すぐ妻は台所でガチャガチャアザと、皿を洗い始めたからです。

実際、あれは何とかならんものでしょうかねえ。いやべつに、僕は妻の労苦をいたわっているのやないのですわ。僕はとくべつ、女性の味方でも主婦連の廻しものでもないのですからな。しかしあの片づけものを妻がしておるうちに、僕は眠くなってくるので困るのであります。眠くなれば、眠ったらええやないか、と皆さんは思われるに違いない。しかし、眠っては困るんです。それは僕らの生活を知らない人のいうことで、僕らはめったに夜、同じ時間に顔を合わせることはない。僕が早い晩は妻がおそく、妻が早い晩は僕が出張で家をあけている。

僕は会社員ですが、販売課で出張が多い。残業もある。妻はベビー用品の卸問屋おろしに勤めています、仕事先はデパートの売場です。いわゆる出向社員というヤツですな、派遣店員といえますか、問屋の人間をデパートへ向けて手伝いに出す、アレです。ふつうのデパート店員よりも勤務時間が長くなります。デパートが済んでから、また問屋へ帰って仕入れや注文の連絡をしたりするからです。

僕は結婚して二年になりますが、正味、妻と過した時間はのべ何月になりますかね。いつもス

レチガイばかりで、まともに妻の顔を見ることがないので、顔を忘れそうになって困ることがあります。この間も、パツとアパートの戸口であい、こいつ、こんな美人やったかいなあ、と顔ほころばして、手をにぎりかけたたん、キツとにられました。道理で、隣の奥さんでした。あべこべに、駅からの帰り道、肉屋の前で知ってる人にあつて、頭を下げて会釈したら、彼女もニツコリ、

へあら、どうしたの、いま帰り？

とその美人は嬉々として馴れ馴れしく僕に寄り添い、よく見れば女房であつたというような、もう、情けないとも何とも、双方とも、男の鞍馬天狗と女の鞍馬天狗が入れ替り立ち替り、神出鬼没、神没鬼出、

へあら、お帰りなさい

へいや、これから出ていくとこやがな

というような、何ともあわただしい、スレチガイもいいところあります。

だから、たまに二人と一緒に居られる晩というと、親の仇にめぐりあうよりむつかしく、これはもう、祝祭日お祭りであります。

へお帰りなさい、ご苦労さま

と妻はチャブ台の上にビールを一本、しとどに露にぬれたのを置き、ニツコリする。妻は僕の口からいうのも何ですが、二十五ですけれども、小柄なので二十二、三にしか見えない、可愛らしい美人です。

そうして久しぶりに会うものですから、僕にはよけい可愛らしく見え、美しく見え、ビールの

コップをあけるに従って、しだいに陶然として来ました。僕と妻は熱烈な恋愛結婚で、いや尤もはじめは見合いで知合ったのですが、双方でたいへん気に入ってつき合ひ出したのですから、恋愛結婚にまちがひなく、恋女房に違いありません。妻はビールをつぎつつ、

「どないしてたん」

「どないもしてへん。あんたのことばかり、考えてたがな」

「ホンマ？」

「ほんまやて。もう早う、帰りとうて帰りとうて」

「イヤーン、うそばっかし」

「アイタタ」

と、こんな所はどちらの家庭も似たりよったりでしょうから省略させて頂きます。僕はたまらず、久しぶりのスレチガイの恋女房の肩を抱きよせようとしますと、クルリと身ははずして、

「あ、まって、あと片づけしてしまうさかい」

「ええがな、そなん、ほつといて、明日の朝しい。一晚くらい、やめといたらええがな」

「明日の朝つて、また、あたし早出やさかい、ゆっくりしてられへん」

「ほんなら、明日の晩までほつといたらええがな」

「そなんだらしないこと、ウチ、ようせんわ。そなん教育うけてないもん」

うけてないって、内親王さまやあるまいし、食器の汚れものが何やというのだ、天下国家のよ
うに大げさというな。

妻は可愛らしい美人にはちがいないのですが、これでなかなか、ハイ、と素直にいうことを聞

くような奴ではありません。大阪弁でいう〈癪性やみ〉（潔癖家）というのか、おそろしく綺麗好きである。食事の支度よりもあと片づけの方に精力を集中する。僕は、それが女のエゴだといっておるのです。そやないですか、こっちの都合も考えないで、自分の気のすむようにしてから、さアよろしい、どうぞ、といわれたって、こっちも困るし、綺麗好きをそう喧伝することもないでしょう。子供がないせいかもしれませんへみて、みて、わたしこんなに綺麗好き。これぞ申分ない良妻〉とデモるような気がする。

彼女は食事がすむと最後の最後まで片づけものをして、チリ一つとどめず、流しは磨き砂でピカピカに仕上げ、食器はいちいち拭いてしまひこみ、その布巾は石鹼で濯ぎ、一分の狂いもなく、心ゆくまで洗いたててから、やっと満足して僕のそばへくることになってるのです。それだけの手順がすまぬと、身を横たえる気がしないらしいのであります。

僕はといえば、夜はからきし眠たい方や。しかしここで眠ってはならん。何となれば、僕は十日の出張から帰ったばかりで、明日の夜は再び、妻と相まみえることが出来るや否や、神のみぞ知る、ですわ。それで、いかげんにガチャガチャアザアザを止めて、僕が眠くならぬ内に来てくれればいいものを、

へそうかて、気持悪いわ、おいといたら油虫くるし。食器皿ナメられたらいややわ〜

妻は断固としていう。断固の好きな女なんです。たつぷり五十分位、あと片づけをする。

僕は眠たいのをこらえて妻を待っていた。しかし臉がくつつきそうになる。いまここでぐっすり眠れたらどんなに——スーッとすることか。ああ眠りたい。スガスガしい清潔なシート。快い眠り。千金に替え難い眠り。

僕はあわてて目をこすり、腹^{はら}匍^はになり、咳払いし、水を飲み、ついで肘で起き直り、我とわが膝をつねりました。出張のあいだ中、妻のことばかり考えていたのに、こうやって家に帰って待望の時を迎えると、出張の疲れがどつと出て、ただもう眠いばかり、とは何というぶざまなことでしようか。

愛情か睡魔か、僕の体内でしきりに戦っているのですが、どうも眠りたい欲望の方が愛より強いとみえ、僕はいつのまにか、うつらうつらしていたとみえます。

へへへへへへ

と妻が可愛らしい咳払いをして、ネグリジエかなんか着て、横へ来ました。それは分っておるのですが、僕はもう眠くて眠くて、自分ではそのツモリはあつても、眼がいうことをきいてくれない。

へへへへへへ

とまた妻の咳払い。わかつてるがな、さあどうぞ、というこつちや。しかし、もう僕は泥のような眠りの中で、何の欲もトクもなく、この上の欲といえはソツとしておいてほしいばかり。ついに怒り心頭に発したか、

へ寝呆^{ねぼ}スケ……こらッ、起きなさいよッ

と妻は私の腕をしたたかつねる。

へアイタタ……お前がガチャガチャザブザブをいつまでもやつとるさかい、あかんのやないかへと僕は言つたつもりであるが、へムニヤムニヤとしか聞えないらしく、妻は憤然として、へほんまによう寝るのねえ、パカみたいへ

と憎々しげにののしるのであります。パカでもチョンでも睡魔には克^かてぬ。それでももうろう、

と腕を廻して、妻を抱こうとしましたら、妻はじゃけんにより払って、

「さっきビールなんか飲むからよッ」

飲むからよッて、飲ませたのはそっちやないか。いったい、僕より妻の方がアルコールに強いのですからな。

「自動皿洗い機がもう出来てるのよッ、あれ買ってくればいっぺんで済んで、さっさと寝られるのに」

「買おう、買おやないか、自動皿洗い機、何ぼや、せいぜい二、三千円やろ」

「バカね、五、六万すんのよ、しっかりしてよ、ほんとに買ってくれるの？ あたしを愛してたら買うはずよ」

僕はいっぺんに目がさめた。自動皿洗い機。

五、六万もの機械がないと僕は愛を手に入れることができないのか。あほもええかげんにおいて。

「そんなもん、佐藤栄作にいうて買ってもらえ！」

と僕はきつぱり一喝したつもりですが、またもや、ムニヤムニヤとしか聞えなかったらしく、妻はくやしそうに僕をねめつけて（ような感じがしたのであります）くるりと向うむいてしまう。やれ有難や、と僕は本格的に眠りこんでグッスリ。

朝、目がさめてみると、じつに快適な気分で、心気爽快でしたな。やつぱり宿屋のふとんと、わが家のふとんは違います。それに妻は、れいの綺麗好きからバリツと糊のきいたシーツをあててくれて、ふとんはふかふかと快い。

その上、むし暑さ予防のために、大阪へんでよくやる、寢奠座ねござという、タタミ表のうすいようなものを敷いてくれて汗とりにする。これは浴ゆやりと、いいものです。たしかにすることがゆきとどいて芸がこまかく情が深い。

ああわが家はいいいもんだ、女房よめはんにまさるものなしと、身内にこんこんと愛の泉がふき上る気がして、うつらうつらと夢見ごちで、隣の床に手をのばして、ひしと抱きよせてみると、これがマクラであります。ご本尊はぬけがら。

妻はもう、さつさと起きて、食事もすませたか、鏡台に向って化粧のまっさい中。なかなか容よう子のいい女でして、ちよつとよくしゃべるのが難ですけれど、どこといつてわるいことはありません。どころか、朝になってみると、僕はもう昨夜のしよぼくれはどこへやら、精気がモリモリとみちあふれる気分で、ヤツとばかり掛声もろとも、半身をおこして、顔も心もニコニコ。

妻はふり返り、さも忙しく口早に、

へあ、起きたん？ 今日はず出やから、あたし、もういかんならん

顔を合わせるそうそう、早出とは何ごとだ。妻は腕時計をのぞきこみつ、

へたいへんたいへん、遅刻するわ

僕はしかし、今朝はうらかな気分ですから、気にせず、ゆうべの分も合わせて埋合せをつけるつもりで、

へちよつと来いよ

へなあに、ご飯？

へメシやないよ